アイドル探偵　８　「死のバレンタイン」編

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイドル探偵　８　「死のバレンタイン」編

【Ｎコード】
Ｎ５３９０Ｔ

【作者名】
田中タロウ

【あらすじ】
万年駆け出しアイドル寿々菜×トップアイドル和彦のコメディサスペンス第８弾！バレンタイン、門野プロダクションはＫＡＺＵ宛のチョコレートで溢れ返っていた。ところが送られてきたチョコレートを食べた寿々菜と和彦が倒れてしまい・・・

第1話　チョコレート

バレンタイン。
恋する乙女なら誰しも胸をときめかせるイベントだ。
そしてここにもその例に漏れない制服姿の乙女が一人、胸をときめかせていた。

「おいしーい！！！」

貧乏暇有りの駆け出しアイドル・スゥこと白木寿々菜（しらきすずな）は、
本日２０個目のチョコレートを口の中に入れて叫んだ。
残念ながら寿々菜が胸をときめかせているのは、愛しの恋人に対してではなく、
目の前の大量のチョコレートに対してである。

「幸（さち）さん！これ！これ食べてください！めちゃくちゃ美味しいですう！！！」
「え？どれどれ？ーーーほんと！おいしい！！」
「ね！」

・・・女二人とチョコレート。
こんなに五月蝿い取り合わせはない。
いや、正確に言うとここにいるのは女二人とチョコレートだけではない。
男も二人いる。

アルバイト大学生の江守健史（えもりたけし）がピンクの包装紙をビリビリ破りながら、
苦笑いした。

「スゥちゃんて、雑誌に載ってたプロフィール通り、甘い物が好きなんだね」
「はい！御園英志（みそのえいじ）も甘い物が大好きなんですよ！」

別に御園英志と嗜好が一緒だからと言っても何の自慢にもならないのだが、
寿々菜は鼻の穴を膨らませた。

補足しておくと「御園英志」というのは寿々菜が憧れているトップアイドル・ＫＡＺＵこと岩城和彦（いわきかずひこ）が、
ドラマ「御園探偵」で演じている探偵である。

って、誰もそんなこと聞いていない。

だが、お人よしの江守は「そうなんだ」と微笑んだ。
一方、江守の右隣で黙々と作業をしているのはこちらもアルバイトの黒田という青年。
ただアルバイト大学生の江守とは違い、黒田は失業中のフリーターで、
このアルバイトも仕方なくやっているらしく、
名前の通りどこか「黒」い男である。

ここは、寿々菜と和彦が所属する弱小・門野プロダクションの事務所の一室。
昔は、バレンタインになってもこの門野プロにファンから送られて

くるチョコレートは微々たる量だった。
それが今は、部屋の中がチョコレートの匂いで充満している始末。
その原因はもちろん・・・

「このチョコも、またＫＡＺＵ宛ですね。凄いなー。何個目だろ」
江守が感心したように小包の宛先を見た。
江守の向かいに座っている派遣社員の斉藤幸枝（さいとうさちえ）・２５歳が笑った。
ちょっと目を引くえくぼが可愛らしい。

「そりゃそうよ。ＫＡＺＵはうちの稼ぎ頭だからね。ここにあるチョコの９割は、
ＫＡＺＵ宛でしょうね」

斉藤は、ちょっと自慢しながらもため息をついた。
それものそのはず。
今自分で言った「９割はＫＡＺＵ宛」という膨大な量のチョコレートを裁かなくてはいけないのだから。

ＫＡＺＵのお陰でここ数年門野プロの株は鰻上りである。
そしてその副産物として生まれたのが、このバレンタインの大量のチョコレートだ。
それはもう、日本国内からだけではなく、海外からも送られてくる程。
袋からチョコレートを出すだけでも一苦労だ。

そこで毎年この時期は、アルバイトを雇って「チョコレート解体作業」が行われる。

チョコレートを包みから取り出して、３つの山に分けるのだ。
３つの山の１つは、「市販のチョコで賞味期限が長い物」グループ。
これはまた新たに別の入れ物に入れられて、寄付へ回される。
もう１つは、「市販のチョコで賞味期限が短い物」グループ。
これは大皿に盛られて事務所の中に置かれ「ご自由にお食べください」となる。
運がよければＫＡＺＵの口に入ることもあるが、
ＫＡＺＵは御園英志とは違って甘い物はあまり食べない（ドラマ撮影の時は大変なのである）ので、
ＫＡＺＵファンがＫＡＺＵ宛に送ったチョコレートがＫＡＺＵの口へ辿り着くのは、
宝くじを当てるより低い確率だろう。
ちなみにさっきから寿々菜と斉藤が食べまくっているのもグループ２のチョコレートである。

そして最後の１つは「手作りチョコ」グループ。
これはどうなるかというと・・・残念ながらゴミ箱へ直行である。
賞味期限が明確でないし、身体に良くない物が入っていないとも限らない。
意図的に毒を盛ろうとした訳ではなくても、やはり品質面に心配がある。

そういう訳で、
最初の２つのグループのチョコレートは、めでたく机の上の二つのトレイにそれぞれ入れられるが、
３つ目のグループのチョコレートは、今も黒田の手により机の下の燃えるゴミの袋へと投入された。

「あーあ・・・もったいない」

「食べちゃダメよ、スゥ。って、あれ？スゥ、手伝ってくれるのは嬉しいけど、
こんなところで油売ってていいの？」
「はい。油を挿す場所がないので」

寿々菜にしては気の利いた言い回しである。
要は、仕事がないだけなのだが。

寿々菜はこの道2年弱の高校1年生。
かわいくないこともないが、芸能人としては地味と言わざるを得ない。
お陰で万年駆け出しアイドルで、事務所のこんな雑用も手伝えてしまう。

が、なんでもやってみるもんだ。
突然部屋の扉が開き、そこだけスポットライトが当たったような華やかなルックスの男が入ってきた。
寿々菜憧れのＫＡＺＵである。

「よお、寿々菜。こんなとこで何やってんだ？」
「和彦さん！・・・と、山崎さん」

和彦の後に続いて部屋に入ってきた、和彦のマネージャーの山崎を見て、
寿々菜のテンションが一気に下がる。

山崎は３０男にしながら、和彦に想いを寄せており、
寿々菜にとっては強力なライバルなのだ。
３０男の山崎が「強力」たる所以は、その敏腕マネージャーぶりで和彦に信頼されているから、

そして寿々菜が「芸能人としては地味」なのに対して山崎は「芸能人並に目立つ」から、である。

山崎も寿々菜を見て鼻を鳴らす。

「スゥ。そんなことしてる暇があるなら、演技の勉強でもしろ」
「山崎さん！これだって大切なお仕事ですよ！」
「もちろんそうだ。だから斉藤さんにお願いしてるし、アルバイトも雇ってるんじゃないか。
スゥにはちゃんと自分の仕事がある・・・いや、ないか」
「・・・」

山崎さんの話術に磨きがかかっているのは気のせいかしら？
和彦さんと一緒にいる時間が長いからかな。

全くもって寿々菜のご想像通りである。

「まあまあ、いいじゃねーか、山崎。頑張れよ、寿々菜」
「はい！」
「そこの皿にあるのが、今年のチョコレートか？」
「そうよ」

斉藤が頷きながらグループ2のチョコレート、
つまり「市販のチョコで賞味期限が短い物」グループのチョコレートが入ったトレイを手に立ち上がった。
そして、和彦が指差した大皿にそのトレイのチョコレートをざっと盛る。
この作業はもう何度も繰り返されているので、皿はチョコレートで

いっぱいだ。

「うわあ、溢れちゃう！」

斉藤はそう言って、皿の淵からチョコレートを二つ摘んで口に入れ、
ついでに「スゥも手伝ってよ」と寿々菜に言う。
もちろん寿々菜に断る理由はなく、斉藤に負けじと（？）四つ食べた。

「・・・ほとんどはＫＡＺＵさん宛なんですから、ＫＡＺＵさんも少しくらい食べたらどうですか？」

どこからともなく声がした。
みんな一瞬誰の声か分からず、キョロキョロと部屋の中を見回したが、
やがて全員の視線が黙々と作業を続ける一人に集中した。

黒田である。

黒田さんてしゃべるんだ。

これは必ずしも寿々菜１人の心の声ではない。

「それもそーだな。一個くらい食っとくか」

目の前に富士山よろしく積み上げられたチョコレートのほとんどが
自分に贈られたものだというのは、
いかに慣れっこの和彦でも悪い気はしない。

和彦は「ふふん」と鼻で笑って頂上の台形型のチョコレートを一つぽいっと口へ放り込んだ。

ちょうどその瞬間・・・！

「く、苦しい・・・」

突然寿々菜がお腹を抱えて椅子から転げ落ち、そのまま動かなくなった。

「・・・寿々菜？」

和彦はチョコレートを飲み込んでからようやくそれが演技でないことに気付き、

寿々菜に駆け寄った。

山崎と斉藤、バイトの２人も慌てて寿々菜の周りに集まる。

「おい！寿々菜！どうしたんだ！」

「スゥ！」

「スゥちゃん！」

いくら呼びかけても、寿々菜は和彦の腕の中でぐったりとして目を閉じている。

全員に動揺が走った。

だが、さすがに一番最初に我に返ったのは山崎だった。

普段は憎き恋敵ではあるが、山崎にとって寿々菜は事務所の大事な商品でもある。

「・・・救急車だ！」

「はいっ」

江守が勢い良く返事して携帯を手に部屋を飛び出していくと、
斉藤は半泣きになって寿々菜の横に跪(ひざまづ)いた。

「スゥ・・・どうして・・・何か良くない物でも食べたのかしら・・・」

「え？」

和彦が寿々菜から視線を斉藤へ移し、更にそれを机の上に移す。
そこには所狭しとチョコレートの箱が山積みされている。

「・・・まさか・・・」

そう呟くと同時に、
和彦は強烈な吐き気を感じ、寿々菜の上に覆いかぶさるようにして
気を失った。

第2話　狙われた和彦？

「山崎さん！寿々菜さんは！？」
「和彦さんはこちらの病室です」

山崎からの電話で病院に駆けつけた武上と山崎の間で、チグハグな会話のやり取りが行われる。

ぶっちゃけ、武上は寿々菜の心配しかしておらず、山崎は和彦の心配しかしてないのである。

それでも山崎は一応付け加えた。

「スゥはこの棟じゃありません。一般病棟です」
「え？じゃあここは？」
「特別病棟です」

武上はグルリと頭を1回転させた。
照明はシャンデリアだし床は大理石だし・・・
確かに「特別」病棟である。

「こういうとこって、汚職をした政治家が警察やマスコミから逃げるために、
『体調不良のため入院』とか嘘言って入るとこじゃないんですか？」
「刑事の武上さんがそれを言うんですか」
「僕の担当は政治家ではなくて殺人犯ですから」
「でも、政治家が殺人をしたら武上さんの担当になりますよね」
「そりゃそうです」

なんとも日本の将来が心配になる会話である。

だが、若手刑事の武上がこうして入院している恋人（一方的に）の元に駆けつけられるのは、武上の上司の三山刑事と平和な日本のお陰だろう。

「とにかく、和彦さんの顔はみんな知ってますからね。こういうところじゃないと、すぐに和彦さんが入院していることが広まってしまいます。そうなると仕事に影響するかもしれないし、ファンが病院に押しかけないとも限りませんから」

「・・・」

和彦の人気は、和彦嫌いの武上としても認めざるを得ないので、山崎の言っていることが決して有りえない事ではないのは分かる。それにもしそうなれば結局騒ぎを解消するために出動するのは警察だ。

ここは和彦の「特別（病棟）扱い」にも目を瞑るしかない。

「でも！それなら寿々菜さんもこっちの病棟に移すべきです！寿々菜さんだって芸能人なんですから！」

「武上さん。芸能プロダクションに所属している人間は、全員芸能人なんです」

またチグハグな会話だが、山崎が何を言いたいのかは、寿々菜に恋する武上にも分かる。そしてこれもまた認めざるを得ない。

「そ、それで、2人の病状はどうなんですか！？」

「2人とも検査は済みましたので、今は結果待ちです。
でも和彦さんの意識はまだ戻りません。スゥは・・・あ、来ましたよ」
「え！？」

武上が勢い良く振り向くと、
確かに派遣社員の斉藤幸枝に付き添われた寿々菜が頼りなげに歩いてくるのが見えた。

「寿々菜さん！」
「武上さん？どうして・・・あ、山崎さんが連絡したんですね？」

山崎としては、寿々菜と武上がくっついてくれた方が、和彦を独占できて嬉しいのである。
寿々菜もその魂胆は知っているものの、いつもなら武上に心から、
「お見舞いに来てくださってありがとうございます！」と、
輝かしい笑顔（武上視点）で言うのだが、
今日ばかりは顔を真っ赤にして山崎を睨んだ。

「山崎さん！どうして武上さんを呼んじゃったんですか！」

武上にとってはショック１００％な言葉である。

が。

「そんなことより、スゥ。歩いて大丈夫なのか？検査結果は？」
「・・・それは、その・・・」

寿々菜が更に赤くなって俯くと、
斉藤が苦笑いしながらバトンを受け取った。

「山崎さん。スゥは単に食べ過ぎでした。チョコの」
「は？」
「だから入院の必要もありません」
「・・・」

山崎の険悪オーラの中、
武上が必死に取り繕う。

「いやー！ただの食べ過ぎですか！よかったです！
寿々菜さんにもしものことがあったら、どうしようかと気が気じゃなかったんです」
「はい・・・ありがとうございます。すみません」

もう謝るしかない。

しかし過去を振り返らない主義の寿々菜はすぐに復活した。
過去にしてしまうには若干早過ぎる気はするが、そこはスルーしておこう。

「和彦さんは！？山崎さん、和彦さんも倒れたって聞きましたけど、和彦さんも食べ過ぎですか！？」
「スゥじゃあるまいし」

山崎を左手首を軽く振って腕時計を見た。

「そろそろ検査結果が出るから、医者の話を聞きに行こう」
「はい！」

やれやれ。

武上はちょっと笑って肩をすくめた。

寿々菜さんは、和彦みたいな目立つ奴より、
俺みたいな普通の奴の方が似合うと思うんだけどなあ。

だが、寿々菜はいつも和彦に夢中なのである。
しかしそういう所も含めて、武上は寿々菜を気に入っているのだ。

寿々菜が行くのであれば仕方ない。
武上は、寿々菜・山崎・斉藤の後ろについていった。

「毒！？」

思わぬ危険な単語に、全員が声を上げた。
３０台半ばのいかにもデキそうな医者がしたり顔で頷いた。
しかし残念なことに、その後ろの若いナイスバディ（寿々菜視点）の看護婦が、
「生ＫＡＺＵを診れる！」とばかりに目を輝かせているので、やや雰囲気に欠ける。

だが、それで「毒」という言葉自体が軽くなる訳ではない。

「毒と言っても市販の殺虫剤です。ただ、非常に強い殺虫剤なので、大量に摂取すれば、人間でも簡単に死に至ります。
岩城さんの胃から検出された殺虫剤は微量でしたので、命に別状はありませんが、
何日かは入院してもらわなくてはなりません」
「・・・・」

４人は顔を見合わせた。
和彦が毒で倒れたという驚き、
入院するほど酷いのかという心配、
そしてトップアイドルであるＫＡＺＵが仕事を出来ないという損失。
色々な思いが行きかう。

しかし更なる問題が現れた。

「岩城さんは倒れる直前に何か食べましたか？」

医者がカルテを見ながら山崎に訊ねた。

「ファンからのチョコレートを一つ」
「危険ですね。今そちらの手元にあるチョコレートは全て手をつけずに置いておいてください」
「はい」
「それと、これは事故ではなく事件だと思いますので、
警察に通報させて頂きますがよろしいですね？」
「それには及びません。こちらの方は刑事さんですので」

驚く医者を無視して、山崎は武上に目で「穏便に済ませてください！」と訴えた。

武上も山崎のさっきの話を思い出し、軽く頷く。

そして寿々菜は・・・

堪らず部屋を飛び出し、和彦の病室へと駆け込んだ。

第3話　ナイスバディな看護婦さん

「俺も命が狙われるようになったかー。有名人も楽じゃないぜ」
病院とは思えない豪華な病室のベッドの上に寝そべったまま、和彦はしたり顔で頷いた。
寿々菜と山崎はそんな和彦を見て涙ぐまんばかりだ。

「和彦さ～ん・・・無事でよかったです・・・」
「俺があんくらいで死ぬ訳ないだろ。そーいや寿々菜も倒れたんだったな。大丈夫か？」
「はい！私は毒に当たった訳じゃありませんので、元気です！」
「んじゃ、なんで倒れたんだ？」
「そ、それは・・・」

寿々菜がおどおどしていると、病室の扉が開き、
先ほど和彦の病状を説明してくれた医者が入ってきた。
ナイスバディな看護婦も一緒である。
寿々菜と山崎の「和彦に近寄る危険女察知レーダー」が素早く反応した。

「岩城さん、お目覚めですね。少し身体を見せて下さい」
医者は手早く和彦の目や口の中を診て、聴診器で腹と背もチェックし、
微笑んで頷いた。
「大丈夫そうですね。でも2，3日は入院して頂くことになります」
「えー？俺、仕事があるんだけど。なあ、山崎？」

「はい。でも和彦さんのお身体が第一ですので」
「そうですよ」
医者も請合う。
「まだ検査も残っていますから、医者としてもまだ退院を認められません。
あ、申し遅れました。私は岩城さんを担当させて頂きます、医者の坂井（さかい）と申します。
こちらは看護婦の森下です」
「森下です。よろしくお願いします」
森下が大きな瞳を好奇心でキラキラさせながら、深くお辞儀をした。
これは本当に危険な女である（寿々菜＆山崎視点）。
「後もう一人、高井戸というベテラン看護婦も岩城さんを担当させて頂きますが、
今日明日は学会で県外に行っていますので、明後日、改めてご紹介します」
ベテラン看護婦さん・・・
寿々菜は医者の言葉にホッとした。
ベテランということは、この森下のように若い看護婦ではないだろう。
要注意人物は少ないに越したことはない。
しかし和彦は、自分を担当する看護婦が若かろうがベテランだろう

がナイスバディだろうが、
関係ないようである。
山崎を見て顔をしかめた。

「社長になんて言うんだよ？あのガメツイ狸親父は、俺が2日も3日ものんびりしてるのなんて、
絶対に許さねーぞ？」
「そこは私がスケジュールを調整して、なんとかします」
「私も、お手伝いします」

山崎の横で斉藤も力強くそう言う。

「そっか？じゃー、ゆっくりさせてもらうかぁ」

和彦がベッドの中で「うーっん」と背伸びをすると、
寿々菜はすかさず和彦の傍に駆け寄った。

「和彦さん！何か食べたいもの、ありますか！？
果物ですか？お菓子ですか？あ、和彦さん行き着けの来来軒のラーメンですか！？」
「・・・お菓子は当分いい」

さすがの和彦も、若干懲りているようである。

さて、賑やかな病室の声を背中で聞きながら、
武上は1人、病院の外に出るべく廊下を歩いていた。
もちろん、この「事件」を携帯電話で上司の三山に報告するためである。

和彦は気に食わない奴だが、今回は一応被害者だ。
武上としても放っては置けない。

それでも「ま、焦らなくていいか」と1階のロビーにある自動販売機でコーヒーなんぞのんびり飲んでいると、
武上の刑事の目が1人の男を捕らえた。

黒いダッフルコートに身を包んだ、どこか陰気な感じの小柄な男だ。
病院の案内図をじっと見ている。

武上は不自然でないようにコーヒーを飲む振りをしながら、
目だけその男の方へ向けた。

確かに陰気臭い男ではあるが、特に怪しいという訳ではない。
ただ武上が気になったのは、その男の視線が案内図の左上の部分・・・
特別病棟の最上階からずっと動かないように見えたからだ。

和彦がいる場所である。

ただの偶然か？
あそこには他の病室もあるし・・・

しかし和彦が運び込まれたばかりのこのタイミング、というのがどうも気になる。

だがどちらにしろ、特別病棟には許可のある者しか入れない。
男はしばらく案内図と睨めっこをしていたが、やがて諦めたのか、

踵を返して病院を出て行った。
武上は男の顔を頭に叩き込んでから、紙コップをゴミ箱へ入れた。

「ＫＡＺＵが毒入りチョコレートを食べて入院、か。なかなかセンセーショナルだな。
雑誌だと『死のバレンタイン！』とでもタイトルがつきそうだ」
「そうですね。一応生きていますが」
三山と武上がこんな軽口を叩けるのも、和彦が元気だからだろう。
本当に死んでしまえば、それどころではない。
電話越しに三山のため息が聞こえた。

「そう。幸いなことに和彦君は生きている。だからこの事件はうちの課の担当じゃない」
「はい」
「しかるべき部署に回そう。だが、ちょっと難しいかもしれないな」
「え？何がですか？」
武上は携帯を耳に押し当てた。
「確かに和彦君は事務所に送られてきた毒入りチョコレートを食べて倒れたが、
絶対に和彦君宛のチョコレートだとは断言できない。事務所には他の男性タレントもいるんだろう？」
「はい」

「もしかしたら和彦君以外に送ってこられたチョコレートをたまたま和彦君が食べただけかもしれない。
それにまだ毒入りチョコレートが皿の中に何個か混じっているかもしれないが、
包み紙からは出されているから、どこの誰が送ってきた物か特定するのは難しいだろう。
よっぽど特徴のあるチョコレートで、包み紙から出した人が覚えていれば別だが」
「・・・」

そんな事はまずないだろう。
木を隠すには森の中、ではないが、犯人の心理を考えると、
毒入りチョコレートを敢えて目立つようにするとは思えない。

「もっと言うと送った本人も、それが毒入りチョコレートだと知らなかったかもしれない」
「え？」
「誰かがイタズラで、店に並んでいるチョコレートに毒を入れて、
それを買った人が門野プロダクションに送ったとも考えられる」

武上は見えないと分かっていつつ、携帯を持ったまま頷いた。

確かに、人気アイドルを狙った事件のように見えるが、
実はそうではなく、和彦が毒入りチョコレートを食べたのは偶然が重なっただけかもしれない。

「悪質なイタズラに変わりはないがな。今の段階ではまだ和彦君を狙ったとは断言できない」
「それはつまり・・・和彦に警護はつけられない、ってことですか」
「残念ながらそうだ」

政治家などならともかく、警察から見ればいかに人気アイドルといえど和彦は一般人。
狙われているという確証なしに一般人に警護をつけられるほど警察に人手はない。
しかし三山も和彦の身を案じているのか、
「病院の特別病棟ならよほど安全だから、しばらく入院しておく方がいいかもしれないな」
と付け加えた。

和彦の入院は2，3日じゃ終わりそうもないな。

と、嫌な予感にため息をつく武上であった。

第４話　お坊ちゃまな刑事さん

病院から出たところで寿々菜は足を止め、
和彦が入院している特別病棟の最上階を見上げた。

武上の話だと、安全面を考えて和彦はしばらく入院することになるらしい。

前を歩く武上・山崎・斉藤に気付かれないよう、
学校指定の鞄をそっと覗くと、赤い紙袋が見えた。
この袋は今日、寿々菜の鞄の中から無くなるはずだったが、
残念ながらその予定はお流れになりそうである。

あーあ・・・

寿々菜は小さくため息をつくと、その紙袋の代わりに一枚のカードを取り出した。
プラスチック製のカードで、寿々菜の顔写真が貼られている。
他にも寿々菜の名前と連絡先が印字されており、
病院名と和彦の担当医である坂井医師の印鑑、それに何やらよく分からないバーコードも入っている。

和彦に会うための許可証である。

特別病棟に入るのにも、和彦の部屋に入るのにも、
これを壁に取り付けられたカードリーダーにかざさないと鍵が解除されないのだ。

だが許可証があれば、面会時間を気にすることなくいつでも和彦に会いに行くことができる。

今のところこの許可証を持っているのは、寿々菜の他は山崎だけだ。許可証を持っている人数は少ない方がいいということで、斉藤は持っていない。

武上は警察なので手帳を見せれば入れるが、

今のところ武上が和彦を見舞う予定は当然のごとく無い。

・・・これは和彦さんに会うためのパスポートみたいな物だから、大切にしなきゃ。

「スゥ、行くぞ」

山崎がタクシーに乗りながら寿々菜に呼びかけた。

「あ、はい」

寿々菜は許可証を鞄に丁寧にしまうと、

もう一度和彦の病室の方を見てからタクシーに向かって走り出した。

「武上さん」

2日後。

武上は昼休みの警視庁の食堂で、声をかけられた。
武上の一年後輩の、和田という新米刑事だ。

武上は、１７５ちょっとの身長に刑事らしく程良い筋肉質だが、男臭いというところまで行かない。
だが、このお坊ちゃま刑事の和田に比べると、自分が随分おっさんに思える。

和田は警視庁内の女性の間で「かわいい」と評判の笑顔で、
武上の前の席に腰を下ろした。
持っているお盆の上には、
いかにも和田らしくサンドイッチと紙パックのコーヒー牛乳がちょこんと乗っている。

「和田。お前、昼飯それだけで足りるのか？」
「はい。充分です」
「張り込み中に腹減るだろ」
「減りませんよ」

どこまでもお坊ちゃまな男である。

「ところで武上さん。一昨日のＫＡＺＵが毒入りチョコレートを食べたって事件ですけど」
「おい！声がでかい！」

武上は慌てて和田の口を塞いだ。
被害者が有名人のＫＡＺＵということで、この事件は庁内でも限られた人間しか知らないのだ。
事務所もマスコミに対して「ＫＡＺＵはインフルエンザのため自宅で休養中」と公表している。

「すみません」
「そう言えば、和田が担当だったな。何か進展でもあったのか？」
「どちらかと言えば、後退がありました」
「は？」
「寄付予定のチョコレート、事務所内で食べるはずだったチョコレート、破棄予定のチョコレート、
全て鑑識でチェックしてもらいましたが、毒は出ませんでした」
「え？」

武上は、うどんを食べる手を止めた。

「大変だったんですよ！何万個もあったんですから！」
「ちょっと待て。毒が出なかった？一つも？」
「はい」

そんな馬鹿な。
バレンタインのチョコレートは、大きなもの以外は普通何個か入りになっている。
和彦が食べたのは小さなチョコレートだということだったので、
武上はてっきり同封のチョコレートには全て毒が仕込んであると思っていたのだ。
しかし、和田の話だと毒が入っていたのは和彦が食べた一つだけ。
つまり同封の他のチョコレートには毒が入ってなかったということになる。

何万分の1の確立を引き当てたのか、和彦は・・・。
なんて運の無いやつなんだ。

和田は紙パックにストローを刺しながら愚痴った。
「僕も鑑識につきあいましたけどね、あんな大量のチョコレート初めて見ましたよ。
匂いで気持ち悪くなりました。お陰で先輩達に貰ったチョコレート、全然食べれてません。
あ、武上さん、いりませんか？どうせ誰からももらってないでしょ？」
「・・・いらん」
嫌味でなくさらっとこういうことを言うのが和田である。
そして更に追い討ちをかける。
「そう言えば、武上さんが片思いしてるっていう女子高生からは貰ったんですか？」
「・・・」
武上は無言でうどんをすすった。
「あれ。じゃあ本当に一個も貰ってないんですね」
「・・・」
「そうそう、女子高生と言えば。昨日、事情聴取のためにＫＡＺＵに会ってきたんですけど・・・
あ、ＫＡＺＵって優しくていい人ですよね。体調崩してるのに、嫌な顔一つせず対応してくれました」
「・・・」
「その時、ＫＡＺＵのお見舞いに事務所の後輩の女子高生が来てました。確かスゥとかいう子ですよ。
テレビじゃあんまり見ないけど、なかなか可愛い子ですよね。僕、

結構タイプです」
「・・・」
いちいち地雷を踏む男である。

和彦の奴、警察の前でもＫＡＺＵモードでやってんのか。
よくやるよ。

毎度のことながら、和彦の二重人格には驚かされるというか、呆れさせられるというか。

それにしても寿々菜さん。どうしてチョコレートをくれなかったんだろう・・・
寿々菜さんなら、義理でもくれそうなものだけど・・・

武上はここ2日間ずっと引き摺っている謎（落ち込み？）をそのままに、
その後無言でうどんを食べ続け、
箸を置いたところで和田が武上に二つ折りにした紙を一枚差し出した。

「なんだ、これ？」
「ＫＡＺＵのサインみたいな物です」
「みたいな物？」

武上にとってはそんなもの珍しくもなんともない。

というか、どうでもいい。

しかし、何故か和田も少し眉をひそめた。

「でも、ちょっと驚きました」

和田が武上に渡した紙を指差す。

「何が？」

「見てください、それ」

和田に言われた通り、紙を開いて見てみる。

そして・・・

武上は目を見開いたのだった。

第5話　陰気な看護婦さん

「ふざけるのもいい加減にしろ」

武上が心底うんざりした声でそう言うと、
ベッドの上の和彦は珍しく少し顔を赤らめて不機嫌になった。

「何のことだよ」
「分かってるだろ。これだ」

和田から借りてきた紙を和彦の顔の前につきつける。

「和彦。なんだ、これは。ウサギの糞か？それにしちゃ四角いよな」
「・・・」
「幼稚園児でももうちょっと上手に描けるぞ」

紙に描かれている、和田曰く「ＫＡＺＵのサインみたいな物」・・・
それは、和彦が食べた毒入りチョコレートの絵だった。
和田が「覚えている範囲でいいので、描いて下さい」と頼んで和彦
に描かせたのだが、
どこをどう見てもチョコレートには見えない。
武上の言うとおり、どちらかといえば「四角いウサギの糞」である。
これでは全く手がかりにならない。

「御園英志は絵が得意なんだろ」
「絵じゃない。モンタージュだ」
「似たようなもんだ。あれって和彦が描いてるんじゃないのか？」

和彦がますます不機嫌になり、口を尖らせた。

「んな訳ねーだろ。プロに描いてもらってるんだよ」
なんとも身も蓋もない話である。
だが、実際はそんなものだろう。

女好きで、甘い物嫌いで、絵が苦手な和彦が、
女嫌いで、甘党で、絵が得意な御園英志を演じてるのか。

武上は思わず吹き出した。
が。

照れ隠しのためか、むすっとした顔で窓の外を睨んでいる和彦の顔に陽が当たるのを見て、
武上は首をかしげた。

「お前、ちょっと痩せたか？」
「ちょっとどころじゃねーよ。思いのほか胃がやられてて、全然食えねえんだよ。
点滴でしか栄養とってない。安全面云々の前に、普通に1週間は入院だ」
「・・・」

武上は紙を胸ポケットにしまうと、
病室の椅子に腰を下ろした。
さすがに特別病棟だけあって、
椅子もパイプ椅子などではなくきちんとしたソファだ。

「寿々菜さんは？」
「さっき帰った。律儀に毎日来てる」
「・・・そうか」

今更そんなことでヤキモチを妬くでもない。
だが、普段は憎まれ口を叩きまくりの和彦がベッドの上で痩せているのを見ていると、
武上でさえ少し憐れに思うのだから、寿々菜はたまらないだろう。

「武上」
「なんだよ」
「一昨日の夜・・・俺が入院した日の夜も、見舞いに来たみたいだぜ」
「？寿々菜さんが？」

一昨日は見舞いというか、寿々菜も倒れて和彦と一緒にここに運ばれ、
和彦の意識が戻るのを待って武上たちと一緒に帰ったはずである。

しかし和彦は首を振った。

「寿々菜じゃない。いや、誰だかわかんねーけど、夜中に病室に誰か来たんだ」
「なんだって？」
「扉が開く音がして目が覚めて、見たら扉のとこに誰か立ってた。
でも廊下の光が逆光になって、シルエットしか見えなかった」

武上は顔をしかめた。

「医者か看護婦じゃないのか？」

和彦が敢えて武上にこんな話をするということは、
そうじゃないことは分かっているが、一応確認してみる。
しかし案の定、和彦は「いや」と言った。

「寝てる振りして見てたけど、扉の辺りから動く様子がなくて、
なんか部屋に入っていいのかどうか悩んでるみたいだった。
で、思い切って、誰だ、って声かけたら、逃げるようにして出て行
ったから、医者とかじゃないと思う」
「でも、ここに入れるのは病院関係者と、許可証を持ってる寿々菜
さんと山崎さんだけだろ」
「あと、警察もな」

和彦はチラッと武上を睨んだ。
武上が本当に驚く。

「おいおい。なんで俺が逃げるんだよ。そもそも用もないのに俺が
お前に会いに来る訳ないだろ」

今日だって和彦の絵の下手さをおちょくりに来たのだ。
・・・まあ、少しくらい見舞ってやらないでもない、というのもあ
るが。

「俺が弱ってるのをいい事に、俺の息の根を止めて寿々菜を自分の
物にしようとしたんだろ？」

なるほど。その手があったか。

武上はまた本気で納得した。
が、一応武上も刑事である。
そんな卑劣な真似はしない。多分。

「その話、和田に・・・昨日、事情聴取志に来た刑事に話したか？」
「あんなお坊ちゃま、アテにできるか」
「・・・」
「あいつといい、武上といい、ろくな刑事がいねーな。三山を寄こせ、三山を」
「三山さんは俺と一緒で殺人の担当だ。お前が死んだら来てくれるよ」

と、その時、病室の扉が開いた。
ちょうど今「扉の所に人がいた」という話をしていたので、二人ともドキッとしたが、
扉の向こうから姿を現したのは坂井医師と看護婦の森下と、
和彦も見たことのない中年の看護婦だった。
黒い髪を前髪ごと後ろでひっつめてるせいか、眼鏡の奥の目が釣りあがっていて、
いかにも「ベテラン看護婦」という感じだ。
ただ、髪を止めている黒いバレッタが妙にごつくて、
チグハグな印象を与える。

これが以前坂井の言ってた、高井戸という看護婦なのだろう。
若い森下など、この高井戸にかかれば一吹きで吹っ飛ぶに違いない。

「こんにちは」

坂井がにこやかに和彦と武上に挨拶をする。
森下は和彦を見て目を輝かせたが、高井戸の鋭い視線に身を縮めた。

「顔色は良さそうですね。あ、こっちが前にお話した看護婦の高井戸です。
さっき学会から帰ってきたばかりですが、岩城さんの病状はもう把握してくれています」

和彦はテレビでお馴染みのＫＡＺＵスマイルで「よろしく」と言ったが、
高井戸は表情一つ変えず、無言でお辞儀をしただけだった。

武上は、高井戸がいるとなんだか息苦しいな、と思った。
だが、坂井はさすがに慣れていて、高井戸の態度を気にすることなく和彦に言った。

「今日から岩城さん担当の看護婦は高井戸と森下の二人になります。
困ったことがあったら、二人になんでもおっしゃって下さい」
「はい」

その後、坂井は和彦の身体をチェックし、
看護婦二人と出て行った。
扉が閉まる前に森下が和彦にウインクを飛ばし、
また高井戸に睨まれるというオマケは付いたが・・・。

和彦と武上は扉が閉まると同時に、
緊張の糸が切れたかのように、ほっと息をついた。

第6話　ファンレター

「３６．４度。平熱ですねー。お腹はすきますか？」

看護婦の森下が魅力たっぷりの笑顔（森下自身視点）を和彦に近づけた瞬間、
和彦はこの退屈な入院生活を乗り切るある方法を思いついた。
そして素でもテレビ向けのＫＡＺＵモードでもない・・・
世間のお姉様方がテレビのＫＡＺＵから想像する「きっとＫＡＺＵって普段はこんな人よね」モードに入る。
ややこしいが、早い話が小悪魔モードである。

「そうですね。すくはすきますけど、今は食べ物より別の物が欲しいな」

と、森下の目を見ながら言い、
読んでいた雑誌をサイドボードに置いてベッドに横たわった。

森下も敏感にその意味を理解する。

「別の物？何かしら？」

そう言いつつ答えは分かっているので、
森下はベッドに両手をつくと、和彦の顔に前髪がかかる程かがみ込んだ。
和彦も答える必要はないと分かっているので、何も言わない。

「・・・ＫＡＺＵってほんと、綺麗な顔してる・・・」

そう呟いた森下の前髪が、ゆっくりと和彦の上に降りていったが・・・

「森下さん」
「きゃっ！」

森下が文字通りベッドから飛び上がる。

和彦も目だけ声のほうに向けると、
病室の入り口に、ただでさえ吊り上がっている目を更に吊り上げた
高井戸看護婦が立っていた。

ちぇっ。いいとこだったのに。

しかしＫＡＺＵはそんなことを顔に出してはいけない。
まるで何事もなかったかのように、高井戸にもＫＡＺＵスマイルを
向けた。

「どうしたんですか、高井戸さん？」
「・・・岩城さんにお手紙が来ています」
「手紙？」

高井戸は無表情にスタスタとベッドに近寄った。
その髪をきつく結わえているのはまたあの黒くてごついバレッタだ。

和彦は首を傾げた。

随分年季の入った特徴のあるバレッタだな。
それに・・・なんか、見たことあるような、ないような。

高井戸は和彦の視線に気付くことなく、
さっき和彦がサイドボードに置いた雑誌の上に数枚の封筒を置いた。

その封筒の雰囲気だけで和彦には分かった。
ファンレターである。

「え？病院宛に届いたんですか？」
「そうです。１０通ほどですが」

さすがに和彦も驚いた。
病院名はもちろん、和彦が入院していることも公表されていないのに・・・。

しかし人の口に戸は立てられない。
こういう噂はすぐに広まるものだ。
今日は１０通だが次第に増えて、いつの間にかＫＡＺＵが入院していることが世間中に広まることだろう。
なんとかそれまでには退院したいものである。

それにはまず、体調の回復と事件の解決ーーーせめて、今回の事件はＫＡＺＵを狙ったものではないという確証が必要だ。

ったく。頼むぞ、お坊ちゃま刑事。と、武上。
いや、ここはやっぱ三山しかアテになんねー。

高井戸と、高井戸につつかれるようにして森下が病室を出て行ったのを見てから、
和彦はため息をつきながら封筒を手に取った。
どれも分厚目の封筒で、ピンクや水色の物ばかりだ。
茶封筒でいいじゃないか、と和彦はいつも思うが、
ファン心というものなのだろう。

「お？」

和彦は上から3つ目の、やはりピンク色のざらついた封筒を抜き出した。
特に変わったところはないが、表に書かれた「ＫＡＺＵ様」という宛名の文字に見覚えがある。
ちょっと崩したような、それでいてどことなく統一性のある文字。
最近の若い女の子がみんな書くような文字だ。
だが、「様」という字の右側の「木」の下が撥ねている。
小学校の書き取りのテストなら、バツが付けられるだろうが、
和彦はここに見覚えがあったのだ。

裏返してみると・・・

ぷっ。「寿々菜より」だってさ。
やっぱりな。

なんと寿々菜からのファンレターである。
確かに寿々菜はＫＡＺＵに会いたいがために芸能界に飛び込んだほどのＫＡＺＵファンではあるが、

個人的に知り合いになった今、ファンレターも何もなさそうなものである。

だけど、こーゆーとこがかわいいんだよな、寿々菜は。

さっきの森下とのおふざけのことなどすっかり忘れて、
和彦はニヤニヤしながら封を切った。

が、これがいけなかった。
和彦も入院生活のせいで、武上さえ認める推理力が鈍っていたのかもしれない。

しまった！と思った時には、
和彦の指から血が滴り落ちていたのだった。

「わ、わ、私じゃありません！」

寿々菜は半泣きどころか、本当に涙を流しながら訴えた。

「私、和彦さんにカミソリを送ったりなんかしません！」
「分かってるって」

和彦は高井戸に右手の人差し指に包帯を巻いてもらいながら、苦笑いをした。

しかし、和彦に呼び出されて来た武上と山崎は「苦笑い」ではなく単に「苦い」顔をしている。

「毒入りチョコレートに続いて、カミソリ入りのファンレターか。和彦、お前、随分恨みを買ってるようだな」
「カミソリ入りのファンレターなんか珍しくねーよ。まあ確かに、古風って意味じゃ珍しいけど」
「それにしても続くな」
「まーな。でもたまたまだろ」
「・・・」

果たしてそうだろうか？

和彦はのんびり構えているが、
武上は刑事の直感とでも言おうか、
二つの事件は同一犯によるものだという気がした。

「なんで同一犯だと思うんだよ？」

和彦が訊ねる。

「ファンレターが病院に送られてきたからだ。
どうして、カミソリ入りを含めたこの１０通のファンレターの送り主達は、
和彦がここに入院してるって知ってるんだ」
「だからそれは、どこからか噂が・・・」
「どこからってどこだ？和彦がここに入院してると知ってるのは、チョコレート事件の担当刑事達と俺、病院の一部の人間、それに事務所関係者だけだろ。
誰が言いふらすっていうんだ？」

「・・・」

和彦は黙り込んだ。
もちろん絶対とは言えないが、警察と病院は守秘義務があるから、和彦がここに毒入りチョコレートを食べて入院しているなんてことは言いふらさないだろう。
事務所関係者は、尚更だ。
ＫＡＺＵが命を狙われたなどという噂が広まっては、自分で自分の首を絞めるようなものなのだから。

「寿々菜さん」
「・・・はい」

寿々菜はハンカチで顔の下半分を押さえたまま武上に返事をした。

「寿々菜さんは、本当に和彦にファンレターを送ってないんですね？」
「送ってません！私、カミソリなんて・・・」
「カミソリじゃなくて、ファンレターです。
もし寿々菜さんが本当に和彦にこの手紙を送ったのなら、
カミソリは誰かが後から入れたのでしょう」
「ああ・・・そういうことですか・・・いえ、私、和彦さんにファンレターは送ってません」
「では、これを書いたのも寿々菜さんではない？」

武上は、ビニール袋に入った封筒を寿々菜に見せた。
カミソリが入っていたピンクの封筒である。

寿々菜はじっとそこに書かれた文字を見た。

「・・・違います。私の字に似てますけど、違います」

武上が頷く。

「最近の女の子はみんなこんな字を書きますからね。真似るのは難しくないでしょう。

だけど、木辺の下を撥ねるというのは、確かに寿々菜さんの癖と同じですね？」

「・・・はい」

武上は今度は山崎の方を向き、

「事務所の人間で、チョコレート事件のことを知っている人は誰ですか？」と訊ねた。

事務所の人間なら寿々菜の筆跡を真似ることができると思ったからだ。

と、和彦が無言のままふいっと窓の外へ顔を向けた。

それを見た寿々菜は、昨日の武上同様、和彦の痩せ方が激しいことに驚いた。

そしてその和彦らしくない表情にも。

「――――では、和彦がここにいるのを知っているのは、」

「武上さん、山崎さん！私、喉が渇きました！何か飲みに行きませんか！？」

「え？ああ、わかりました。じゃあそうしましょう」

寿々菜は涙を拭うと笑顔を作り和彦に明るく、

「和彦さん！明日またお見舞いに来ますね！」と言った。

第7話　呼び出し

「どうしたんですか？急に喉が渇いただなんて」

病院の近くの喫茶店に入り、
寿々菜と武上、山崎は早めの夕食を取っていた。
寿々菜はともかく、武上と山崎はこのタイミングを逃すと、
いつ夕食にありつけるか分からない。

「いえ・・・和彦さん、なんだか元気がなかったから。
ずっと食べてないし、病室から出ること事も禁止されてるし・・・
気が滅入ってるみたいに見えたんです」

寿々菜は甘い紅茶を飲んだ。

意外なことに、和彦の推理に役立つほど寿々菜の直感は鋭い。
その心配は的中していた。
和彦は、自分の頭がいつものように働かないことに気付き、急に焦りを感じていたのだ。
加えて、誰かが自分の命を狙っているかもしれないという不安・・・。
いつもならそんなこと気にも留めない和彦だが、
やはり体力の低下というものは、人間を追い詰める。

武上と山崎は無言で視線を交わした。

「分かりました、寿々菜さん。
和彦の前では必要以上に事件の話をしないようにします」
「ありがとうございます！」

和彦さんが病院から出られないんだったら、
その分私が頑張らなきゃ！
私は和彦さんの助手なんだから！！！

寿々菜が決意で目を輝かせると、
武上は笑顔で頷いて手帳とボールペンを取り出した。
以前、寿々菜が勤労感謝の日にプレゼントしてくれたボールペンだ。
武上が愛用しているのは言うまでもない。

「では話に戻りますが、僕と警察関係者以外で和彦があそこにいるのを知っているのは・・・」
「病院では院長と特別病棟の医師と看護婦だけです」

山崎が自信たっぷりにそう言う。

「特別病棟の他の入院患者やその見舞いの人間はどうですか？」
「特別病棟の病室は全てトイレと風呂が付いていますから、
和彦さんも他の入院患者も検査以外は病室を出ません。
検査時間もずらしてありますから患者同士顔を合せることもありません。
そもそも和彦さんは病室で検査をやってもらってますから、他の見舞い客と会うことも無いでしょう」
「なるほど」

あの森下って看護婦は口が軽そうだけど、大丈夫だろうな・・・？
友達に「ＫＡＺＵがうちの病院に入院してるのよ！しかも毒入りの

チョコレートを食べて！」
とか、平気で言いそうだ。

まあ、武上がそう心配するのも無理からぬことだ。

「門野プロダクションの方は？」
「社長と私とスゥだけです」
「和彦が入院した時に寿々菜さんと一緒にいた女性は？」
「派遣社員の斉藤幸枝ですか。そうか、彼女も知ってますね」
「あ」

寿々菜はサンドイッチを口に運ぶ手を止めた。
どうでもいいことだが、武上は、
寿々菜のことをかわいいと言っていた和田刑事も以前サンドイッチを食べていたのを思い出し、
なんとなく面白くない気持ちになった。

「あの時・・・和彦さんが倒れた時、
幸さんと私、ファンから送られてきたチョコレートを箱から出してたんです。
アルバイトの男の人2人も一緒でした」
「そう言えばそうだったな」

山崎が寿々菜から引き継いで続ける。

「確か、江守という大学生と、黒田というフリーターでした。
あの時だけの臨時アルバイトで今はもういません」
「その2人も、和彦が入院してることは知ってるんですか？」

これは危ない。
ただのアルバイトなら平気で言いふらすだろう。
武上は素早く2人の名前をメモした。
そして、それと同時にあることをふと思い出した。

「入院のことや毒入りチョコレートのことは知らないと思いますが・・・
救急車が来た時その場にいたので、
和彦さんとスゥが病院に搬送されたことは知ってるはずです」
「2人はどんな男ですか？」
「え？ですから江守は大学生で黒田はフリーターで・・・」
「容姿のことです。どんな顔ですか？あの日、どんな服を着てましたか？」
「え？顔と服？」

そう言われると、山崎も困ってしまう。
山崎が江守と黒田を見たのは和彦が倒れる前後だけである。
しかし寿々菜は違う。
江守と黒田と一緒に1時間以上作業をしていた。

寿々菜は必死で記憶を辿った。

「えっと、江守さんは爽やかなスポーツマンタイプの人でした。
茶髪で・・・確かニットにレザーのジャケットを羽織ってました。
黒田さんはなんとなく暗い感じの人で無口でした。
小柄な割に大きなダッフルコートを着てて・・・」
「何色のダッフルコートですか？」
「黒、だったと思います」

武上は手帳を閉じて立ち上がった。

「山崎さん。黒田という男を事務所に呼び出してください」

「ごめんなさいね。バイト代の計算が間違ってて、2千円少なく渡しちゃってたの。
もちろん今日の交通費も上乗せしとくから」

斉藤は、チョコレートがないことを除けば以前と全く同じ部屋で、
2千円＋αを入れた茶封筒を二つ、机の上に置いた。

江守は「ありがとうございます」と言って、
黒田は無言で、
それを受け取った。

武上が山崎に呼んで欲しいと頼んだのは黒田だけだが、
2人一緒の方が黒田も怪しまないだろうということで、江守も呼び出すことになったのだ。
ちなみに封筒の中身は山崎のポケットマネーである。

「・・・斉藤さん」

予想外なことに、黒田が口を開いた。
斉藤が緊張する。

「な、何？」
「この部屋・・・防犯カメラなんかありましたっけ？」

「え。あ、ああ、あの・・・」

黒田が斉藤の後ろの壁に設置されたカメラに目をやった。

斉藤の背中に冷や汗が流れる。
まさか気付かれるとは・・・
しかし、なんとかシラを切るしかない。

「き、昨日付けたの！ほら、前にＫＡＺＵとスゥが倒れたでしょう？
あの時はたまたま私たちがいたけど、
またあんなことがあった時に１人だったら誰も助けてくれないから、
全部の部屋に防犯カメラをつけて、警備室のモニターで見れるようにしたのよ！」
「・・・そうなんですか」
「え、ええ！他の部屋はまだだけどね！明日、付けるの！」

「うまい」

武上は斉藤たち３人がいる隣の部屋でモニター画面を見ながら、
思わず息をついた。

寿々菜と山崎も同様だ。

「幸さんて、頭の回転速いですね」
「スゥと違ってな」
「・・・」

とにかく、斉藤の機転でなんとか黒田に防犯カメラを怪しまれなくて済んだ。

黒田はそれ以上防犯カメラには触れずに、封筒の中身を確認している。

『そう言えばＫＡＺＵさんの入院、長引きそうなんですか？大丈夫ですか？』

モニターを通して江守の声がした。

『ええ、大丈夫よ。ただの食あたり』

『スゥちゃんも？』

『えっ。あ、そうよ。２人で一緒にレストランでお昼ご飯食べたんだって。

多分２人ともそれにあったたのね』

『そうなんですか？酷いレストランだなー』

「幸さん、すごーい」

「派遣社員じゃなくて役者として雇いたいな」

「寿々菜さん、山崎さん。それどころじゃありませんよ」

武上は顎に手を当て、モニターに映る黒田の顔をじっと見た。

間違いない。

和彦が入院した日に、病院のロビーで案内板を見ていた黒いダッフルコートの男だ。

やっと手がかりが出たぞ！

武上はモニターを見つめたまま、

携帯電話で和田刑事の電話番号を呼び出した。

第8話　訪問者

ガタ・・・カラカラ・・・

扉の開く音で和彦は目を覚ました。

あれ？俺、寝てたのか？

今何時だ？

部屋の中は暗く、寝起きの和彦には分からないが、
実は時間はまだ午後８時。
食べては寝ての繰り返しの入院生活を送っていると、
体内時計もおかしくなる。

和彦は時間を確認しようと携帯電話を探して、
ベッドに横になったままサイドボートへ手を伸ばした。
廊下から差し込んでくる光が眩しすぎて、逆に視界がはっきりしない。

・・・廊下からの光？

和彦はガバッと身を起こした。

部屋の扉が５０センチほど開いていて、その光の中に誰かが立っているのが見える！

しかしまた逆光でその顔は全く見えない。

「誰だ！？」

和彦が大きな声で叫ぶと、
光の中の人物は身を強張らせ、走って逃げ出した。

扉が自動でスライドして閉まる。

和彦はベッドから飛び降りて追いかけたかったが、
体力が付いてこない。

「くそっ！」

苛立ち紛れにサイドボートに置いてあった雑誌を扉に向かって投げつけたが、
雑誌は扉のだいぶ手前にパサッと落ちただけだった。

扉の向こうの足音が遠ざかって行く。

「・・・またかよ。誰なんだ、一体・・・」

和彦はベッドに自分自身を叩きつけるようにして仰向けになり、
握り締めた拳を額に置いた。

「・・・はい。確かにそれは僕です」

容疑者（？）が余りに簡単に警察の言い分を認めると、
警察も思わず拍子抜けするものである。
嘘でも「違います！それは僕じゃありません」と言ってくれた方が
張り合いが出るという物だ。
まあ、助かるには助かるが。

武上に呼ばれて門野プロダクションに飛んできた和田刑事は、
黒田の真意が読み取れず、困って隣の武上を見た。
武上はこの事件の担当ではないが、
被害者の和彦と知り合いだし、怪しい男を見た目撃者ということで
同席している。

ちなみに、事務所のこの一室にいるのは、武上・和田・黒田だけで
ある。
さすがに一般人の寿々菜は警察の事情聴取に加わることはできず、
別室で山崎・斉藤と一緒に待機している。
江守はもう帰ってよいということで、先ほど事務所から出て行った。

和彦がいたら、当然の如く事情聴取に参加するだろうな。

そんなことを考えながら、武上は黒田にもう一度確認した。

「では、和・・・ＫＡＺＵが倒れた日に、あの病院にいたのは間違
いなくあなたなんですね？」
「はい」
「何をしてたんですか？」
「ＫＡＺＵさんのお見舞いですよ」

「・・・」

怪しいな。

武上と和田は小さく頷き合った。
山崎から聞いていた通り、黒田は随分と陰気臭い雰囲気を持った男だ。
口数も少ない。

こんな男が倒れた和彦をすぐに見舞いに行くだろうか？
何か別の目的があったのではないだろうか？

例えば、毒を盛って殺そうとした相手が本当に死んだか確認するために、とか。
黒田なら、そういう理由の方がしっくりと来る。

ところが。

「ＫＡＺＵさんが倒れたのは僕のせいですから」
「え？」

またもやアッサリと自白・・・した訳ではないようだ。
黒田は本当に申し訳なさそうに目を伏せながら言った。

「バレンタインで大量のチョコレートがＫＡＺＵさんに送られてきたのに、
ＫＡＺＵさん、全然食べようとしなかったんです。僕なんて一つももらえないのに・・・

それで思わず、
『ほとんどはＫＡＺＵさん宛なんですから、ＫＡＺＵさんも少しくらい食べたらどうですか？』
って言ったらＫＡＺＵさんがチョコレートを一つ食べて倒れたんです」
「・・・」

和田はともかく武上にとって、今度の沈黙はさっきの沈黙と違う意味を持つ。
思わず黒田に同情してしまったのだ。
バレンタインにチョコレートをもらえなかった者の気持ちは、
バレンタインにチョコレートをもらえなかった者にしか分からない。

「それで責任を感じて病院に見舞いに行ったって訳ですか？」

和田が疑い半分・うんざり半分と言った調子で黒田に尋ねる。

「はい」
「でも特別病棟は許可のある者しか入れないから、諦めた？」
「そうです。分かってて行ったんですけどね。もしかしたら入れるかと思って、」
「ちょっと待ってください」

同情モードから復活した武上が割り込む。

「分かってたって、どういうことですか？」
「だから、特別病棟には許可がないと入れないって、」
「そうじゃなくて、どうして和彦が特別病棟にいるって知ってたんですか？」

黒田は「和彦？ああ、ＫＡＺＵさんの本名ですか」と1人で頷いた。
「江守君が教えてくれたんですよ」
「江守？」

さっきの、もう一人のバイトが？

「救急車が出た後、僕が自分のせいでＫＡＺＵさんが倒れたって落ち込んでたら、
江守君がＫＡＺＵさんが搬送された病院名を教えてくれたんです。
『でも、多分特別病棟に入るだろうから、許可がないと見舞いはできないよ』とも」

武上はハッとした。
黒田の言うことは１００％信用できる訳ではない。
それにもし本当だとしても、例えば江守が救急隊員の会話を聞いて、
和彦の搬送先や特別病棟のことを知ったとも考えられる。

だが武上は思い出した。
さっき江守がモニター越しに、
「そう言えばＫＡＺＵさんの入院、長引きそうなんですか？」と言っていたことを。

どうして江守は和彦が入院したことを・・・
今も入院してることを知ってるんだ？

江守の周りで和彦が入院していると知っているのは、
寿々菜と門野社長、山崎だけだ。
3人とも和彦の入院のことを人にペラペラ話すとは思えないし、
そもそも江守はバレンタインの日以来、今日まで事務所には来ていない。
どこで和彦の情報を手に入れたというのだろう？

武上は部屋を飛び出すと、
急いで山崎のところへ向かった。

第9話　百合の花

和彦はまた扉の開く音で目を覚ました。
反射的にベッドから身を起こす。
しかし部屋の中は窓から差し込む光で明るく、
入ってきたのが看護婦の高井戸と森下だとすぐに分かってホッとした。

「おはようございます、岩城さん。よく寝てらっしゃいましたね。
昨日の夜寝れなかったって言ってたけど、スッキリしましたか？」

森下が、高井戸の視線を気にしながらも相変わらず魅力的な笑顔で
和彦に話しかける。

「はい・・・今、何時ですか？」
「2時ですよ。午後2時」
「2時・・・」

和彦はぼんやりと窓の外へ目をやった。
確かにそれくらいの時間の日差しだ。

昨日は結局あのせいで和彦は朝まで眠れず、
朝日が昇ってからようやく眠ることができたのだ。
まだ寝不足で頭がボーっとする。

「岩城さん。検温をお願いします」

眼鏡とバレッタが特徴の高井戸が、和彦に体温計を差し出した。
森下とは正反対だが、こちらも相変わらずの無表情だ。
和彦も今日はさすがにＫＡＺＵスマイルをサービスする気力もなく、
黙って体温計を受け取る。

「やだっ！何これ！？」

突然、森下が甲高い声を上げた。
和彦も高井戸も一応森下の方を向いたが、
森下のようなタイプは何事にも大袈裟に驚く、という先入観のせいか、
２人とも何かとんでもないことが起きたと思った訳ではない。
案の定、森下が驚いた対象は・・・
なんてことはない。花瓶に飾られた花である。
しかし、その花自体が確かに問題ではあった。

「お見舞いに白い百合なんて・・・非常識だわ」

森下が、サイドボートに置かれた百合の花が入った花瓶を持ち上げる。

「縁起も良くないし、匂いもきついし。誰が持ってきたんですか？」

和彦は体温計を脇の下に差し込んだまま、
白い百合を見つめた。
今朝、寝るまではこんなものはなかった。
つまり和彦が朝から今まで寝ている間に、誰かが持ってきたのだ。

「・・・誰だったかな。忘れました」
「そうですか。匂いで気持ち悪くなりません？
部屋の外に出しておきましょうか？」
「はい。あ、いえ、やっぱりそのままでいいです」

森下が一度持ち上げた花瓶を「そうですか」と言って下ろす。

ちょうどその時、検温終了を知らせる「ピピピ」という音が服の下からした。
和彦が体温計を高井戸に返し、
高井戸が検温結果をカルテに書き込んでいると、
また部屋の扉が開いた。
しかも今度はかなり勢い良く。

「和彦さん！」
「おー。寿々菜」

いつもよりことさら明るい笑顔で寿々菜が病室に飛び込んできた。
入れ替わりに高井戸と森下が出て行く。
森下はすれ違いざま、チラッと寿々菜を見たが、
寿々菜はそれに気付いていないのか、それとも気付いているけど敢えて無視しているのか、
笑顔を絶やさない。

和彦もなんとなくホッとして笑顔になる。

「お見舞いに来ました！お暇かと思って、事務所からこれを持ってきましたよ！」

寿々菜が元気いっぱいに和彦に差し出したのは、「御園探偵」の第7弾の台本だった。
和彦の場合、何か仕事をしている方が気が紛れていいだろと思って持ってきたのだ。

「そういや、もうすぐクランクインだったな」
「そうですよ！だから早く元気になってくださいね」
「ああ。サンキュー」

それからも寿々菜は笑顔を絶やすことなく、
とにかく和彦を楽しませようと、色んな話題を振りまいた。
和彦も久々に大いに笑い（失笑も多々あったが・・・）、
だいぶすっきりしたところで、ふと窓の外に目がとまった。

眼下に広がる病院の中庭を森下が若い男と2人で歩いている。
遠くから見てもその親しげな様子は分かるが、
いちゃいちゃしているというのとも、少し違う。

あの男・・・どっかで見たことがあるな。

和彦はそう思ったが、どうにも思い出せない。

入院してから、こういう「思い出せない」ってことが多いな。
やっぱ思考回路が鈍ってんのかな。

それでもしばらく粘ったが、やはり思い出すことができず、

和彦は諦めて視線を寿々菜に戻した。

「そうだ、寿々菜。事件の方はどうなってる？」

「えっ。事件、ですか」

「毒入りチョコレートの事件と、カミソリの事件だよ。なんか進展あったか？」

「えっと・・・」

寿々菜は和彦から視線を外した。

和彦のために、事件の話はしたくなかった。

事件のことを思い出せば、和彦は無意識のうちに推理しようとするだろう。

だけど今は頭が回らない。

そしてそれをストレスに感じ、気分が落ち、ますます頭が回らなくなる・・・

そんな悪循環に陥りかねない。

だが、もし寿々菜が今正直に警察の調査の進展を話していれば、和彦は、森下と一緒にいる男が誰か思い出していただろうに、うまくいかないものである。

「あの、その・・・あ、百合の花！綺麗ですね！」

寿々菜は話題を逸らすために、目に付いた花瓶に駆け寄った。

「誰が持ってきてくれたんですか？」

「寿々菜じゃねーのか？」

「え？私じゃないですよ？」

「・・・そうか。寿々菜じゃないのか」

「？」

寿々菜は、和彦の独り言に首を傾げながらも、
百合の香りを胸いっぱいに吸い込んだ。
独特の香りが鼻腔をくすぐる。

「はあ！いい香りですね！和彦さんが百合を好きなのが分かります！」
「なんだ。俺が百合の花を好きなの知ってるのか？」
「はい！」

寿々菜が「どうだ」と言わんばかりに胸を張る。

「ＫＡＺＵファンとして当然です！」
「あはは、そうか。でもそうだな。
雑誌とかの俺のプロフィールに『好きな花は白い百合』って載ってるもんな」
「はい！このお花を持ってきた人も、和彦さんのファンなんですね、きっと」

俺のファン、か。

和彦は寿々菜の言葉に頷きながら、
頭の片隅に光る信号を、しっかりとキャッチした。

第１０話　退院？

その光景はあまりにもお馴染み過ぎて、
寿々菜も武上も山崎も最初、なんら疑問を感じなかった。

「なんだ、和彦も来てたのか」
「おお。お前らか。ちょっと腹が減ってな」
「ふーん。芸能人も暇なもんだな」
「うるさい。お前の方こそ事件抱えてるくせにこんなとこで油売ってていいのかよ」
「油売ってる訳じゃない。今から寿々菜さんと山崎さんと一緒に事件について・・・」

そこまで話したところで、武上はようやく気付いた。

「和彦！？なんでこんなとこにいる！？」
「だから腹が減ったんだって」
「病院は！？」
「自主退院」
「はあ！？」
「和彦さん！」
「ダメです！戻ってください！

ようやくその「異常」に気付いた寿々菜と山崎も参戦する。
が、突然現れた第３者によりその戦争はあっさりと終焉を迎えた。

「『こんなとこ』で悪かったね」

ダンッと、和彦が座っているテーブルに水の入ったコップが３つ置

かれる。

「あ、おばさん・・・お久しぶりです・・・あの、私、ラーメン」
「ぼ、僕も寿々菜さんと一緒で・・・」
「僕はチャーハンで」
「はいよ」

来来軒のおばちゃんは、オーダーをメモに取ることもなく、
厨房へ引っ込んでいった。
3人は息をついて、取り合えず和彦と同じテーブルにつく。
和彦は既にラーメンを半分以上食べ終えていた。

和彦の隣に座った武上が和彦を肘でつつきながら小声で怒鳴る。

「勝手に病院を抜け出すな！大騒ぎになるだろ！」
「うるさい。最近どうも頭が回んねーんだよな。
良く考えたら、ガス欠だった」

ガス欠・・・確かに栄養不足ではあっただろうが、
和彦にとっての「ガス」はここ来来軒のラーメン・チャーハン・餃子である。
実際、まださすがに痩せたままではあるものの、和彦の顔には生気が戻っていた。

「全然食ってなかったのに、いきなりラーメンなんか食べて大丈夫なのか？
普通、お粥からとかだろ」
「そんなヤワじゃねーよ。この後チャーハンと餃子も来る。
寿々菜、今日は俺が全部1人で食うから、お前の出番はないぞ」
「はい！いっぱい食べてくださいね！」

普段なら和彦はさすがに1人でラーメン・チャーハン・餃子を食べることはできない。
だから来来軒に来る時はたいてい寿々菜を呼び出し、
2人で、ラーメン2杯とチャーハン一杯、餃子一皿を食べるのである。
和彦が寿々菜を「チャーハン&餃子半人前要員」と呼ぶ所以だ。

「で、チョコレートとカミソリの事件はどーなった？」

和彦がラーメンをすすりながら武上に訊ねる。
武上は寿々菜から、和彦に事件の話をしないで欲しいと言われているので少し悩んだが、
今目の前にいる和彦はすっかりいつもの和彦なので、
まあいいだろう、と口を開いた。

「犯人は分かってない。でも、お前が倒れた時に傍にいたバイトの江守健史という大学生が怪しい。
お前が運ばれた病院や今も入院してることを知ってたんだ」
「ふーん。で、そいつはなんて言ってるんだ？」
「それが行方不明なんだ。1人暮らしのアパートにここ2日帰ってない。
大家に頼んで部屋を見せてもらったが、特に変わった様子はなかった。
小旅行に行ってるのか、友達の家にでも泊まってるのか・・・」

チョコレート事件で警察が動いていると知っているのは事情聴取を受けた黒田だけだ。
江守は知らない。
だから江守は警察から逃げるために部屋に戻っていない訳ではない

だろうが、
もしかしたら危険を察知して身を隠しているとも考えられる。
それにまだ黒田も完全にシロとは言えない。

「江守に黒田、か。あの時雇われてたバイトだな」
「そうだ」
「ふーん・・・。カミソリの方は？」
「あっちは全くダメだ。カミソリが入っていた封筒には差出人の住所はなかったし、
他の９通を出した人達に和田が連絡を取ったが、全員、
ネットの上の『〇〇という病院にＫＡＺＵが入院している』という書き込みを見て、
見舞いのファンレターを書いた、と言ってる」
「それ、江守か黒田が書き込んだのか？」
「黒田は否認してる」

最初の１０通のファンレター以来、
その書き込みを見たらしいファンからの病院宛のファンレターは日に日に増えている。
最も、全て手付かずのまま警察に渡しているが、あれ以降危険なファンレターは一通もない。

「はい、お待ち」

おばちゃんが、寿々菜たちが注文したラーメン二つとチャーハン一つを持ってきた。
会話が一時中断して、箸やレンゲのやり取りが行われる。

「あんたのチャーハンと餃子はもうちょっと待ってな」

「ええー？おせーなあ。いつもすぐ出てくるのに」
愚痴る和彦を無視し、再び厨房の中へ戻って行くおばちゃん。
和彦は「ま、いいや」と鼻を鳴らすと、寿々菜たちに向かって言った。

「そうそう、こっちはまたちょっとあったぞ」
「あったって何が？」
「昨日の夜の多分８時くらいに、誰かが俺の病室を覗いてた」
「また？」

寿々菜と山崎が驚いて「え？」と言って皿から顔を上げる。
先に我に返ったのは山崎だったが、
寿々菜は何故かいつまで経ってもポカンとしていた。

「そんなことがあったんですか！？しかも『また』って・・・」
「昨日のが２回目だ。２回ともなんもせずに逃げていったけどな。
あ、でも、今回は昼に起きた時に病室に白い百合が置いてあった。
そいつが置いていったのかどうかわかんねーけど」
「危険ですね。社長に頼んで病院を変えましょうか？」
「いい。どうせもう退院したし」
「まだだろ。それ食ったら、さっさと戻れよ」

武上がうんざりしたようにそう言う。
と、ようやく寿々菜が口を開いた。

「和彦さん・・・誰かが覗きに来たって、それ、確かに昨日の夜ですか？
しかも２回目？」
「そーだけど？」

「・・・」
「どうしたんだよ、急に黙り込んで」
和彦が向かいの席の寿々菜を覗き込むと、
寿々菜は赤くなっておろおろと和彦から視線を逸らした。
「な、何でもありません！」
「変な奴だな。だけどまあ、変な奴って言えば、今回の事件の犯人も変な奴だよな。
毒入りチョコレート、カミソリのファンレター、夜の訪問、白い百合の花。
何がしたいのか、よくわかんねー」
和彦が分厚いチャーシューを箸でつまむ。
「和彦。何も全部同じ犯人と決まった訳じゃないだろ」
「んじゃ、犯人が４人もいるってのか？」
「４人とは限らないがな。お前、よっぽど恨まれてるな」
「うるさい。犯人がたくさんいたら面倒だ。１人にしとけ、１人に」
「しとけって言われてもな・・・」
武上はまたうんざりしながらも、
いつもの和彦節に内心ホッとした。
やはり和彦は憎まれ口を叩いているくらいがちょうどいい。
と、そこに、再びおばちゃんが登場した。
手に持っている皿には見事な巨大ピラミッド・・・の形に盛られた大量のチャーハン。
その麓のレタスの上には所狭しと香ばしい薫りの餃子が敷き詰められ、

頂上にはミニトマトがちょこんと一つ鎮座していた。

「うわっ！すげえ！」

「なんか退院がどうのとか言ってたから、大盛りのサービスだよ」

「サンキュー、おばちゃん！気が利くな！」

和彦はニンマリしながら早速ピラミッドの頂上のミニトマトを口に放り込んだ。

退院したばかり（誰も認めてないが）の和彦にとっては意外と酸っぱい味で、

思わず目が細くなる。

「おい。せっかくなんだから餃子から食べろよ。冷めるぞ」

武上がそう言うと、和彦はミニトマトのヘタを指でクルクル回した。

「ほっとけ。こんな頂上にぽつんと一つだけミニトマトが置いてあったら、

一番最初に食べてくれと言わんばかりだろ」

「お前、ショートケーキを食べる時、最初にイチゴを食べるタイプだろ」

「よく分かるな」

ミニトマト・・・

頂上・・・

なんだろう。なんか・・・

「・・・」

「寿々菜？」
「・・・和彦さん。今、何か引っかかりました」
「お！？」

和彦がテーブルに身を乗り出す。

寿々菜お得意の「違和感」だ。
和彦は幾度となくこれに推理を助けられてきた。

「ついに来たか！それがねーとこの小説、始まんないもんな！引っ張りすぎだぞ！」
「しょ、小説？」
「細かいことは気にするな」

和彦の目がより一層輝く。
一方で、ちゃんと餃子を頬張ることも忘れない。

口が餃子に占領されている和彦に代わり、
武上が寿々菜に訊ねた。

「どこにどんな違和感を感じましたか？」
「ミニトマトとチャーハンの頂上。違和感というか、デジャブっていうか・・・
前もこんなことがあった気がします」
「前にもスゥが、和彦さんがこのピラミッドチャーハンを食べてるとこを見ただけじゃないのか？」

山崎の言葉に「違う」と言ったのはようやく餃子を飲み込んだ和彦だ。

「こんなの、初めて食った」
「ですよね。私も、このチャーハンを見たのは初めてです」
「ってことは・・・うーん・・・」

和彦は腕組みをした。
バラバラだったパズルのピースが少しずつ集まって一つになり、
余分なピースが消えていく。

チョコレート、カミソリ、夜中の訪問者、百合の花、ミニトマト、
ピラミッドチャーハンの頂上。
そして「ファン」。

「おしっ」
「なんだよ和彦？なんか思いついたか？」
「ああ」

和彦は自信たっぷりに頷いて言った。

「武上の言う通り、やっぱ餃子は冷めないうちに食わないとな」

第１１話　病院関係者

来来軒での会合（？）の翌日。
今更何の意味があるのかと思うが、
和彦は一応病院のベッドの上にいた。
但し寝てはおらず、ベッドの上で胡坐をかいている。

「何の御用ですか？」

和彦に呼び出された担当の坂井医師と看護婦の高井戸が不思議そうな顔をした。
そりゃそうだろう。
医者と看護婦が入院患者に病気のこと以外で呼び出されているのだから。

ちなみに和彦と坂井と高井戸の他に病室にいるのは、
寿々菜・武上・山崎というお馴染みのメンバーに加え、今回の事件を担当している和田である。

「また、探偵殿の推理披露会か？」
「そうだ。お約束だからな」

冷やかしにこうも大真面目に答えられると困る。
武上はもう何も言わないでおこうと思ったが、
どうしても一つ気になることがある。

「今回は呼び出した関係者が少ないな。俺達と和田を除いたら坂井さんと高井戸さんだけか？」

しかしその坂井と高井戸は呼び出された理由が分からずきょとんとしている。
どう見ても2人が実は犯人でした・・・というオチではなさそうだ。

「いや。他にも・・・お、来たみたいだな」

病室の扉が開き入ってきたのは、門野プロダクションで働く派遣社員の斉藤と、
その後ろからは・・・

「こんにちは、ＫＡＺＵ。言われた通りつれてきたわよ」
「おー、サンキュー」
「・・・こんにちは」

武上と和田は驚いてチラッと視線を交わした。
斉藤がつれてきたのは、フリーターの黒田だったのだ。
しかし、その後更に驚くべき人物が登場した。

「失礼します」

斉藤と黒田から遅れること5分。
看護婦の森下が入ってきた。
そして森下もまた、男を1人、つれてきている。
しかしこちらは、黒田とは打って変わって爽やかな印象の男だ。

が、その男を見た瞬間、
和彦と坂井と高井戸以外の全員が・・・
つまり、寿々菜と武上と山崎と斉藤と和田と黒田の5人が立ち上が

った。

・・・人数が多いとややこしい。
おさらいしておくと、坂井は医者、高井戸は看護婦、斉藤は門野プロの派遣社員、
和田は今回の事件の担当刑事、黒田はアルバイトである。

そこに更に森下と男の２人が加わる。

男は頭をかいた。
だが悪びれているわけではなく、
何故自分がそんなに注目を浴びているのか分かっていないという様子だ。

「どうしたんですか？そんなに驚いて」

驚くに決まってる。
和田が昨日一日探し回っていたのに見つからなかった男が現れたのだから。

「江守！お前、どこにいたんだ！？」

思わずそう叫んだのは当然和田だ。
しかし、どこの誰だか分からない男に呼び捨てで怒鳴られた江守は当然面白くない。
少しムッとした顔になり口を尖らせた。

「ＫＡＺＵが呼んでるからって美由紀に言われてせっかく来たのに、なんだよ、この扱いは？」
「美由紀？誰のことだ？」

全員の視線が病室内を動く。
と、「はぁーい」と間の抜けた声で手を上げたのは森下だった。
武上が和彦を睨む。
「和彦！森下さんと江守が繋がってること知ってたんだな！？
なんで言わなかった！？」
「昨日の昼に森下と江守が病院の庭で話してるのをたまたま見かけたんだ。
そん時は、男が江守だって思い出せなかったけどな。
でももし思い出してたとしても武上に連絡はしなかっただろーな」
「どうして！？」
「だって俺、警察が江守を捜してるなんて知ったのは、昨日の夜だもーん」
江守の真似のつもりか、和彦も口を尖らせる。
「俺に黙ってコソコソ捜査なんかするからだ」
「・・・」
それは寿々菜が和彦のことを思って武上にそう頼んだのだが・・・
癪に障るので、武上はそのことは和彦には言わないでおこうと思い、
口を噤んだ。
和彦が表情を元に戻す。
「とにかく、昨日の夜来来軒で江守のことを聞いた時、
昼間に森下と一緒にいた男が江守だって思い出した。
だから森下に頼んで、江守をここに連れてきてもらったんだ。

これで全員揃ったな」
森下と江守を加えて１１人。
さすがに特別室といえども狭く感じ、椅子も足りない。
和彦以外の人間は思い思いに壁や柱にもたれた。
「これだけいたら、それぞれの事件の犯人は別々でした、って感じですね」
山崎の言葉に和彦が笑う。
「さすがにそれはないな。でも、１人じゃない」
「え？」
「ちょっとおさらいするか。
まず、バレンタインに俺が毒入りチョコレートを食べて病院に運ばれた。
その夜、誰かが俺の部屋に忍び込んだ。
それから3日後にカミソリ入りのファンレターが来て、夜にまた誰かが来た。
で、次の日に・・・つまり昨日、いつの間にか百合の花が飾られていた」
「誰かが忍び込んだ？」
坂井が目を丸くする。
「そんなバカな。ここには許可証がある人間しか入れません」
「それと病院関係者も、な」
「・・・え？」
和彦の言葉に、「病院関係者」である坂井と高井戸と森下が固まる。

「今回の事件は大きく二つに分けられる。俺を傷つけようとしてるか、してないかだ」
「ふむ・・・チョコレート・カミソリと、夜中の訪問者・百合の花、というグループか」

武上が思い出しながら呟く。

「そうだ。チョコレートとカミソリの方はちょっと置いとくとして、まずは夜中の訪問者と百合の花だ。
この部屋に入れる人間は限られている。
警察や寿々菜、山崎が俺に見られたからって逃げたり、こっそり百合の花を置いて行くとは考えられない。
ってことは、残されたのは病院関係者だ」

和彦の目が、坂井・高井戸・森下へ順番に向けられていく。
そして最後のところどそれは止まった。

「森下。お前だな？2回も夜中に俺の部屋に忍び込んだり、百合の花を置いていったりしたのは」
「え？ええ？」

森下がキョトンとする。

「ありゃどう見ても、俺のファンの仕業だもんな。
夜中に忍び込んだのは夜這いでもかけにきたんだろ」

夜這い・・・

寿々菜が赤くなるのはともかくとして、
何故赤くなる、武上。

「俺が入院した時から、俺に色目使ってたしな」

自分のことは棚に上げ、和彦がじっと森下の目を見ると・・・

「・・・はい。ごめんなさい」

森下は最初動揺していたが、
突然しゅんとなって俯いた。

ところが。

「私、ずっとKAZUのファンで・・・」
「そりゃ嘘だな」

自分で振っといて、和彦はぬけぬけとそう言い放った。
全員が「へ？」と首を傾げる。

「お前は俺のファンじゃない。興味本位で俺に近づいてただけだ。
俺が百合の花を好きなことを知らずに捨てようとしたし、
第一お前はこそこそ夜中に俺に会いに来たりしない。
俺にちょっかいかけたけりゃ、昼間に堂々と来るだろ」
「で、でも、今私が犯人だって言ったのは自分じゃない！」
「ちょっとカマかけてみただけだ。
お前は今、病院関係者が夜中に俺の部屋に忍び込んだと聞いて、
心当たりがあった。だからかばっただけだろ？」
「・・・」

今まで森下に向けられていた全員の視線が、
坂井と高井戸に移る。

どっちだ？

しかし、誰かがその疑問を口にする前に、
犯人は自ら「自分です」と申し出た。

第１２話　２人目の犯人

その声に、全員が驚いてぎょっとした。
いや、正確には、和彦はホッとしたのだが。

「はぁ。坂井じゃなくてよかったぜ。
男に花束プレゼントされたんじゃ、気持ち悪いもんなー」
「和彦・・・そういう問題じゃない。
では、夜に和彦の病室に忍び込んだり百合の花を置いていったのは
あなたなんですね？高井戸さん」

武上がそう言うと、高井戸は頭の後ろのバレッタが見えるくらい深
々とお辞儀をした。

「・・・はい。お騒がせして申し訳ありません」

すると山崎がポンッと手を打った。

「そのバレッタ！和彦さんのファンクラブができた時に、
最初の１ヶ月間だけ入会特典として配ってたやつですね！？」
「はい・・・」

高井戸がバレッタをパチンと外すと、
思いのほか豊かで綺麗な黒髪が肩に流れた。
中年だと思っていたが、こうやって見ると結構若い。
まだ３０代前半だろう。

高井戸は大事そうにそのバレッタを胸に抱き締めた。

「山崎さん、でしたっけ？ファンクラブができた最初の１ヶ月間だけ配った、というのは間違いです。
限定１０００個だったので、１週間でなくなったそうです。これは私の宝物です」
「そ、そうですか・・・」

さすがに山崎も、そして寿々菜もそんなことは知らない。
思わぬ強力なライバル出現にたじろいでいる２人はさて置き、武上は和彦の頭をこついた。

「入会特典にバレッタって、ありなのか？」
「いてーな。決めたのはファンクラブの会長だから、文句があるならそいつに言え。
それに俺のファンクラブができたのは７年も前だ。
あん頃はそれが流行ってたんだよ」
「・・・ふーん」

とにかく、高井戸が澄ましたを顔して和彦の大ファンであることは間違いないようだ。
高井戸はバレッタを抱いたまま言った。

「ＫＡＺＵが病院に運び込まれて来たと聞いた時は正直胸が躍りました。
何年も憧れていた人が急に目の前に現れたんですから・・・
でも、いい歳して森下さんみたいに騒ぐこともできないし、ＫＡＺＵといえどもここでは患者さんです。
私は看護婦として接しようと決めました。
だけどどうしても我慢できずに、用もないのに病室を覗きに行ったり、
ＫＡＺＵが好きな花をこっそり飾ったりしてしまいました。

こんな大騒ぎになるとは思ってなくて・・・本当に申し訳ありません」

和彦が武上を見た。
無言だが、その視線には明らかに意味がある。
武上は「やれやれ」という風にため息をついた。

「高井戸さん。あなたのしたことは、患者のプライバシーという点から見れば問題はありますが、
犯罪行為という訳ではありません。ファンの少し行き過ぎた行動、
というレベルでしょう。
ただ、毒入りチョコレートやカミソリ入りのファンレターのことがあったので、
大事(おおごと)になりかねませんでした。今後、気をつけてください」

高井戸はもう一度頭を下げると、今度は森下の方を向いた。

「森下さん。どうして私をかばってくれたの？」
「別に高井戸さんをかばった訳じゃありません」

森下は肩をすくめた。

「ただ、この病室に出入りする病院関係者と言えば、
私以外には坂井先生と高井戸さんだけです。
もしＫＡＺＵの病室を覗いたり花束を置いたりしたのが男で医者の坂井先生だったら、
病院の評判が落ちちゃうじゃないですか。
そんなことになったら私なんかすぐリストラの対象ですよ。
それなら私がやったことにしておいた方が、笑って済まされるかなと思っただけです」

「森下さん・・・ありがとう」
森下は「だから高井戸さんのためじゃないんですって」と言ったが、
なんだか照れ臭そうだ。

そして高井戸が和彦に改めて向き直った。

「あの・・・言い訳をするようですが、私が夜中に忍び込んだのは
一度だけです。
百合を飾りに来たのは朝ですし、その時は岩城さんは目をお覚しに
なりませんでした」
「分かってる。1回目の時は・・・俺が入院した日の夜は、
高井戸は学会で東京にいなかったんだろ？
だからあの日にここに忍び込んだのは高井戸じゃない」

和彦は一拍置いた。

「だよな、寿々菜？」
「！」

寿々菜がトマトのように真っ赤になり、
両手できゅっと制服のスカートを握った。

「き、気づいてたんですか、和彦さん・・・」

武上と山崎が驚いて和彦と寿々菜を交互に見る。

「どういうことだ、和彦？」
「あの日、誰にも怪しまれずにここに忍び込むことができた人間は

何人かいるけど、
そんなことする理由があるのは寿々菜だけだからな」
「理由？」
「あの日はバレンタインだった。大方寿々菜は、
ドタバタのせいで俺に渡しそびれてたチョコレートを持ってきたんだろ」

たいした自信だな。

武上はそう思ったが、同時にそれは事実だろうとも思った。
考えるより先に身体が動く寿々菜がいかにもやってしまいそうなことだ。
実際、寿々菜は先ほどの高井戸のようにうなだれている。

「ごめんなさい・・・」
「なんで逃げた？」
「和彦さんが寝てる間にこっそりチョコレートだけ置いて帰るつもりだったんです。
でも、毒の入ったチョコレートを食べて倒れた和彦さんがチョコレートなんて食べてくれるかな、
って悩んでたら突然和彦さんが起きて『誰だ！？』って言ったんで、
私、ビックリして思わず・・・」
「で、そのチョコレート、どうしたんだよ？」

和彦はもちろん、食い意地でこんな質問をした訳ではない。
夜の病院までチョコレートを持ってきたのに、
それを和彦に渡せずトボトボ一人で帰った寿々菜を多少なりともかわいそうに思ったからだ。

しかし、心配は無用なようである。

「それが、その・・・食べちゃいました」

「は？」

寿々菜が「てへっ」と舌を出す。

「その日のうちに渡せなかったら意味ないかな、と思って。
でも捨てるのももったいないし。
気づいたら、武上さんに渡しそびれてた分も食べちゃってました」

「・・・」

「一応山崎さんにも用意してたんですけど、」

「それも食ったのか？」

「はい」

「・・・お前もチョコレートの食い過ぎで倒れたんだろ」

「あ、そう言えばそうでしたね」

「・・・・・・」

病室の中に呆れた空気が流れる。
唯一幸せオーラを発しているのは言うまでもなく武上だ。

なんだ・・・寿々菜さん、俺にチョコレートを渡す気がなかった訳じゃないんだ。
あったけど、自分で食べただけだったんだ。
ああ、よかった・・・

何がよかったのかよく分からないが、

本人がよかったのなら、そっとしておく事にしよう。
が、そんな穏やかな（？）空気を和田が「待ちきれない！」とばかりに破った。

「それで！それで、岩城さん！チョコレートとカミソリの方はどうなんですか！？
誰が犯人なんですか！？」
「おい、和田。お前、何をソワソワしてるんだ？
『誰が犯人なんですか！？』なんて一般人に聞く警察がどこにいる」
「えへへ、まあまあ、武上さん。怒んないで下さいよ。
僕、『御園探偵』の大ファンなんです！一度ＫＡＺＵの生推理って聞いてみたかったんですよねー」
「和田・・・」

このお坊ちゃま刑事、武上の手にはとても負えそうにない。
しかも、いつもなら「ふざけんな」と一蹴する和彦も、
素直に「大ファンなんです」と言うかわいい和田（和彦より年上だが）に、
悪い気はしないようだ。

「武上も、いい後輩を持ったな」
「・・・」
「だけどな、和田。残念ながら今回は推理するほどのことじゃないんだ」
「えー？そうなんですか？」

本気でがっかりする和田と、
本気で頭痛がする武上。
ついでに言うと、高井戸もいつの間にか和彦の次の言葉を爛々と待

っている状態だ。

いつもならそれ、私の役割なのに！

と、ヒロイン寿々菜は早くも落ち込みモードから復活し、危機感を覚えたのだった。

そんな中、和彦が口を開く。

「チョコレートもカミソリも、さっきの覗き・花束と一緒だ。俺のファンの仕業だ」

「ファン・・・それは、どこかの誰かっていう意味か？」

武上の質問に、和彦は首を振った。

「どこかの誰か、じゃない。ここにいるそいつだ」

和彦は自分の目の前にいる人物を指差した。

第１３話　最後の犯人

「え？」

和彦に指を差され、さっきの森下のようにきょとんとしたのは派遣社員の斉藤幸枝だ。

他のメンバーも「また和彦のカマかけかもしれない」と思い、驚いていいものやら悩む。

しかし和彦は少し厳しい表情のまま追及の手を緩めない。

「チョコレートに毒を盛って俺に食わせたのも、カミソリ入りのファンレターを送ったのもお前だ」

「ＫＡＺＵ・・・どうして私がそんなことするのよ」

「それはお前が俺のファンだからだ。言ったろ？ファンの仕業だって」

「和彦さん！幸さんは違いますよ！」

寿々菜が割って入る。

「幸さんが和彦さんのファンだなんて話、聞いたことありません！私が和彦さんのことでキャーキャー言ってても、幸さんはいつもニコニコして聞いてるだけです！」

「んなもん、黙ってただけだろ」

「でも・・・どうして幸さんが和彦さんのファンだって思うんですか？」

「勘」

「和彦・・・」

武上が和彦の胸倉を掴む。

「おーまーえーはー。なんでそういい加減なんだ！」

「いい加減じゃねーよ。『ああ、こいつは俺のファンだな』ってのは、

隠してても分かるもんだ」

「・・・」

「それに俺、警察じゃねーし。別に証拠あげなきゃいけない訳じゃないだろ？

俺の話を聞いてコイツが怪しいと思ったら、後は警察が頑張って証拠集めしろよ」

「・・・」

ごもっともなのだが、そんなミステリー潰しなことをされては困る。

しかしもっと困ってるのは、勘で犯人扱いされている斉藤だ。

「ＫＡＺＵ。確かに私はあなたを応援してるけど、ファンじゃない。

仮にファンだとしても、ＫＡＺＵを傷つけたりしないわ」

「そうですよ、和彦さん！私、和彦さんのファンですけど、

和彦さんを傷つけたいなんて思いません！」

「寿々菜はそうだろうけど、好きだからこそ傷つけたいってファン心理もあるだろ。

小学生の男子が好きな女子をいじめるのと同じだ。

それに寿々菜、斉藤が俺に毒入りチョコレートを食わせたって言ったのはお前だぞ？」

「え・・・？あ、もしかして・・・」

「そう。昨日の違和感だ」

来来軒でピラミッドチャーハンを見た時に寿々菜が感じた違和感。

どうやら和彦はあれで何か閃いたらしい。

「俺、ああやっててんこ盛りにされてる食い物見ると、どうも一番上のやつから食べちゃうんだよな。
だから昨日も頂上に置かれたミニトマトを最初に食べたんだ。
俺自身が一番上だからかなー？」

いちいち自慢を入れないと気がすまないらしい。
面倒臭いので、武上ももう突っ込まない。
それに話の腰を折るのは、和彦の話を楽しみに聞いている和田になんだか悪い気もする。
（おかしな話だが・・・）

「毎年、チョコレートは皿にピラミッドみたいにてんこ盛りにされて事務所に置いてある。
自分でも意識してなかったけど、俺はいつも一番上に盛られてるチョコレートを食べてたみたいだな。
斉藤はそれを知ってたんだ」
「・・・あ」

寿々菜は思い出した。
そう言えば和彦がチョコレートを食べる直前、
皿にチョコレートを盛ったのは斉藤だった。
あの時、一番上にこそっと毒入りチョコレートを置くことは・・・
確かにできる。

「で、でも！和彦さんがそれを食べなかったらどうするんですか！？
他の人が食べちゃったら・・・」
「俺が食わなかったら、自分で食うふりして捨てればいい話だろ。
斉藤の目的は俺を殺すことじゃない。傷つけることだ。
失敗しても別にいいんだよ。

俺は何万分の1の確立で毒入りチョコレートに当たった訳じゃない。
1分の1だったんだ」

すると和田が刑事の顔になって「でも岩城さん」と言った。

「それだったら、同じ場所にいた白木さんやバイトの2人もできなくはありません。
もっと言うと、岩城さんと一緒に部屋に入ったマネージャーの山崎さんも可能です」

寿々菜と山崎が「そんなことしない！」と殺人的な目で和田を睨んだ。
しかし和彦は「うんうん」と頷く。

「そうだな。それにもうチョコレートは食っちまったから、証拠もない。
でもカミソリ入りのファンレターはどうだ？
寿々菜の筆跡を真似てたけど、筆跡鑑定すりゃ、斉藤が書いたかどうかは分かるだろ？武上」
「ああ。斉藤さん、一応ご協力いただけますか？」

事務所にいる斉藤なら確かに寿々菜の筆跡を真似ることはできる。
斉藤は青くなった。

「・・・そのファンレターが私の出した物だとしても、
チョコレートの方まで私がしたこととは限らないじゃない。
他の誰かの仕業かもしれないじゃない！和田さんだって、そう言って・・・」
「じゃあ、チョコレートの犯人は斉藤じゃないってことにしよう」

突然和彦が掌を返す。

「え？」

「俺を入院させるくらい傷つけたのはお前じゃない。他の誰かだ。お前以上に俺を傷つけたいと思ってる、俺のファンだ。そいつはよっぽど俺のことを好きなんだな」

和彦がそう言ったとたん、
斉藤の表情が厳しくなった。
それは般若の如く・・・とまではいかないものの、
いつもの可愛らしいえくぼの笑顔の欠片もない。

「違うわ！あれをやったのは私よ！」

斉藤の言葉に全員が息を飲む。
だが、斉藤は「しまった」という様子もなく一気にしゃべりたてた。

「私以上のＫＡＺＵファンなんて、世界中どこを探してもいないわ！ＫＡＺＵの傍にいたくて、ＫＡＺＵファンだってことを隠してまで門野プロに入ったのよ！？」

「そんくらいで『私が一番』だなんて言えないだろ」

和彦が鼻で笑うと、斉藤が更にヒートアップする。

「そんなことないわ！だって私はＫＡＺＵを殺せるもの。
ＫＡＺＵが死んでこれから誰の目にも晒されず私だけの物になるなら、
私は喜んでＫＡＺＵを殺すわ！こんなファン、他にはいない、」

「それは違います！！！」

突然、寿々菜が大声で斉藤を遮った。
誰もが・・・和彦も、驚いて寿々菜を見ると、
寿々菜は涙ぐみながら唇をかみ締めていた。

「和彦さんのファンはたくさんいます。誰が一番なんてことはありません。
みんな和彦さんを大好きなんです」
「私は他の子たちとは違うわ。
他の子たちなんて、ファンクラブに入って騒いでるだけじゃない。
私は違う。ファンクラブなんて馬鹿みたいな物には入らない。
私はその他大勢じゃないのよ。私はＫＡＺＵにとって『特別』なんだから」
「幸さん・・・」
「ＫＡＺＵを傷つけてまで自分の物にしようと思えるのは私だけ。
私は他の子たちとは違うのよ。
そうよ、私は・・・」
「和彦さんを傷つけても、和彦さんを好きな証拠になりません。
本当に和彦さんを好きなら、和彦さんの幸せを願うべきです。
幸さんだって本当は分かってるんでしょう？
こんなことしても、幸さんは和彦さんの『特別』にはなれません。
幸さんは、和彦さんを傷つけたただの犯罪者です」
「うるさいわ！」

斉藤が憎しみを込めて寿々菜を睨む。
だが寿々菜はそれに負けじと涙を堪えて踏ん張った。

と、和彦がベッドから下りて寿々菜に近寄り、
その頭を手でポンっと叩いた、というか手を置いた。

「斉藤。寿々菜も俺に近づきたくて門野プロに入ったんだ。しかも

芸能人としてな。
何度社長に『雇わない』って蹴られてもめげずに、ついに社長を口説き落とした。
寿々菜のやり方も正しいとは言い切れないかもしれないけど、
少なくとも寿々菜は俺の邪魔になるようなことは絶対にしない。お前と違ってな」

しかし斉藤は「ふん」と言って嘲笑った。

「芸能人って言ったって、全然芽が出てないじゃない。
流行らないアイドルなんて、誰だってなれるわ。どこかの芸能プロに所属すればいいだけじゃない」

ムッとしたのは寿々菜ではない。
和彦と武上と、そして・・・

「なら、君も芸能人になってみなさい。売れない芸能人の苦労が分かるだろう。
但し、うちでは絶対に雇わないがね」

山崎はそう言うと、「バカバカしい事件だ」と首を振りながら病室を出て行った。

第１４話　もう１人のファン

「大丈夫か、和彦？」

てめーに心配されても嬉しくない。

その目はそう言っていたが、残念ながら言葉にはならない。
それでも、以前とは違って目に力があるから心配ないだろう。

もっとも、武上も本気で心配している訳ではないのだが。

「自業自得だ。胃が弱ってるのに病院抜け出して、
中華料理なんかたらふく食った罰だ」
「・・・」
「スケジュール調整で走り回ってる山崎さんに、後で謝っとけよ」
「・・・」
「和彦さぁ～ん。大丈夫ですか？」
「・・・」

呆れ顔の武上の横で、本気で心配してくれている寿々菜が今ばかりは天使に見える。

そう。和彦は既に全快・・・しているはずが、
自業自得の中華料理で再び胃を壊してしまい、まだ退院できずにいるのだ。
ちなみに今和彦が言葉を発せられないのは、
腹痛のせいではなく、坂井医師がペンライトで和彦の口内チェック

をしているからである。

「はい、口閉じていいですよ。口内炎がいくつかできてますね。栄養不足だからこれは仕方ありません。我慢してください」

「おい・・・結構痛いんだぞ、これ」

ようやく口を閉じれた和彦が、頬をさすりながら言う。

「一応塗り薬は出しておきますね。森下さん、後でさしあげて」

「はい。じゃあ岩城さん、今度はお腹診ますから、ベッドに横になってください」

「へえへえ」

「早くして下さい。坂井先生は他の患者さんも診ないといけないんですから」

「・・・」

和彦の本性を知ったからなのか、
元々興味本位だっただけだからなのか、
森下のＫＡＺＵ熱はすっかり引いてしまったようで、すっかりビジネスライクである。
これで寿々菜も一安心、
は、できないようだ。

「・・・誰ですか、あなた」

寿々菜が睨んだ先には、美貌の看護婦が立っていた。
その綺麗な黒髪を右耳の下で緩く束ねているのは、バレッタではなく紺のゴムだ。

「高井戸です。もちろん」

「・・・眼鏡は？」
「コンタクトにしてみました。ＫＡＺＵさんがその方がいいと言うので」
「・・・バレッタは？」
「大切にしまってあります」
「・・・」

変われば変わるものである。
髪を後ろでひっつめていないので、もう目も釣りあがっておらず、化粧も変えたのか、以前より若く見える。
そして何より、そのキラキラした瞳が一番の変化だ。

「私も、ＫＡＺＵさんの一ファンであることをやめたんです！」
「・・・」
「せっかく神様がＫＡＺＵさんと知り合う機会を与えてくださったんですから、
これからはそれを活かして頑張っていきます」
「・・・」
「あ、でももちろん入院中は看護婦としてＫＡＺＵさんに接しますから、ご心配なく、スゥさん」
「・・・」

ご心配ありまくりである。
こんな女が和彦の周りをうろついていては、
寿々菜はおちおち寝てもいられない。

しかしもちろん和彦は悪い気はしない。

「おー。じゃあ薫（かおる）、俺が復活したら百合のお礼に飯でも食いに行くか」

「本当ですか！？ありがとうございます！」
「ダメです！てゆーか、薫って誰ですか！？」
「だから、私です」

まあとにかく大団円である。
だが、気になることが一つある。

「そういや、森下。
門野プロにバイトに来てた江守と、俺が運ばれた病院の看護婦のお前が恋人なのは、
単なる偶然か？つーか、江守は何者なんだ？」
「偶然じゃありません。岩城さんが倒れた時、彼が私に『美由紀のとこの救急車、すぐによこしてくれ！』って電話してきたんですから。
１１９番だと病院をたらい回しにされる可能性がありますからね。
彼なりに考えて、私に電話してきたんだと思います」
「なんだ。気が利くじゃん、江守の奴」
「そうですよ。それに彼は何者でもありません。ただの大学生です。
あ、でも私の恋人じゃありませんよ？」
「そうなのか？じゃあ単なる友達かなんかか」
「いいえ。兄です」
「・・・」

やはり勘が鈍っているのか、
和彦は見抜けなかったことに若干ショックを受けた。
更に。

「兄にはちゃんと恋人がいます。刑事さん達が探してた時は、
たまたま彼女の部屋に泊まりにでもいってたんでしょう。それに、」
「私は結婚してる、でしょ？」

武上が森下の言葉を引き継ぐ。
森下は少し驚いた顔をしたが、和彦は少しどころの騒ぎではない。
寿々菜は言わずもがなだ。

「はあ！？お前、結婚してたのか！？俺の誘いに乗ろうとしてたくせに！？」
「あれはお遊びです。さすが刑事さんですね。お気づきでしたか」
武上は和彦を横目でチラッと見てニンマリと笑ってから、
森下の左手を指差した。

「薬指に指輪の後がありますね。離婚したばかりで指輪の跡がついているとも考えられますが、
先日より跡が濃くなってる。つまり、普段は指輪をつけていて、仕事の時だけはずしてるってことです」
「なるほどー」
「武上さん、すごーい！シャーロックホームズみたい！」
「いえいえ、寿々菜さん。容疑者が結婚してるかしてないかは、捜査の上で大切ですからね。こういうことには敏感なんです」

おもしろくない。
何度も言うが、いつもはこういうことは和彦の役目なのだ。
全くもって面白くない。

和彦は坂井に聴診器をあてられながら、口を尖らせた。
江守譲りの仕草なのだが、癖になりそうである。

「あはは、おもしろくなさそうですね」

坂井がワイワイ騒いでる寿々菜たちに聞こえないように、小声で言った。

「・・・まーな」

「人間、やっぱりきちんと食べないと、身体だけではなく脳にも栄養が回りません。

だからいつも通りに思考はできないんですよ。退院したら、すぐに元通りになりますから、

心配の必要はありません」

「坂井・・・お前、いい奴だな。あいつらと違って」

「あはは」

坂井が、寿々菜たちがこっちを見ていないのを確認する。

「実は、僕もＫＡＺＵファンなんです」

「は？」

「インターネットに『ＫＡＺＵが入院してる』と書き込んだのは僕です。

他のファンが知らないＫＡＺＵの秘密を暴露したくって、思わず。

すみませんでした」

「・・・」

坂井は和彦に小さくウインクを飛ばした。

世の中、色んなファンがいるもんである・・・。

―――「アイドル探偵　8　死のバレンタイン編」　完　―――

第１４話　もう１人のファン（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました♪
いよいよ「アイドル探偵」の書き溜めがなくなってしまいました（´д｀；）お話は色々考えてるんですが、書く時間が・・・。
書け次第、第９弾も連載していきますので、引き続き応援よろしくお願いいたします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5390t/

アイドル探偵　８　「死のバレンタイン」編

2011年7月25日08時08分発行